

ダイの大冒険  
AfterStory ポップの  
大冒険

ニコヲタ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

戦いは終わる。代償としてダイの姿は消え去って：：ダイに胸を張って、お前の守った世界を見せたくて。ポップはダイを探しに飛び出さなかった。レオナ姫の元、三賢者（仮）として世界の復興へと注力する。ある日テランから、魔物同士の争いと大移動の姿ありと報せが入る。そこに「少年と思わしき人影あり」と。レオナ姫号令の元「悪しき魔物と討伐と、人影の正体を突き止めるのよ、ポップ君!!これはダイ君の捜索じゃなく、民の為なんだからね。」この事件の結末は予想だにできなかった方向へと進んでいく。ポップの大冒険、ここに開幕・・・ケツマツマデカケルカナア

# 目次

Prologue ぼつかりと開いた

孔、大冒険は唐突に

Prologue 1 取り戻された平

和の中で 1

Prologue 2 それぞれの決断

6



Prologue ぽつかりと開いた孔、大冒険は唐突に

## Prologue 取り戻された平和の中で

大魔王バーンは滅び、そして世界は平和を取り戻した。

だが、その代償として最大の功労者である勇者ダイは行方不明となる。

復興する世界の中、大々的に搜索のお触れが出るもダイは依然として姿を見せることは無かった。

そして月日が流れた……

「ここは相変わらず……か、なあ、どこにいるんだよダイ」

日課となった就寝前のルーラでのダイの剣の確認。その宝玉の光を確認して眩くポップ。

「大丈夫じゃ、あの子は必ず戻ってくる。きっとたどり着いた先で勇者をしているんじゃないろう。」

「ありがとな。プラスのじつちゃん。」

ダイに蹴り落とされたあの日。

俺は………ダイを探す旅に、出なかった。

本当は探したかった！何も考えず一人で飛び出したかった！

だけどっ！それは違うだろ！

あいつの親友として、バーンがいなくなっても世界はまだ大きな脅威が去っただけで、真の平和にはなっていない。

そんな世界を放り投げて、ダイを探しに行くなんて！

親友として、ダイに再開した時に顔向けできないっ！

だから親友として、あいつの帰ってきた時に胸を張って誇れるように……

「お前がいらないから俺が代わりに勇者になっちまったじゃねえか。」

とか、言いながらダイの頭をぐりぐりするんだ。きつと、いつかな。

「さて、今日も無事なのを確認したし、俺は帰って寝るよ。」

「頑張つての、ポップ」

「ああ、帰ってくるまで代わりに世界を守ってやるぜ。」ニコッ

それは、よくある夜の光景。

ダイの剣の丘でよくある出来事だった。

翌日。

「おはよう、ポップ。」

「不肖ポップめが、お姫様の案内をつかまつもりまふい!? ゲエツ!」

「いゝゝい? ポップ君。公式の場合じゃないんだから、慣れない言葉を使わなくてもいいのよ?」

「あつ……相変わらず見事なお手前で」

「……」ジトツ---

レオナ姫の渾身のボディーブローを受けるポップ。

今やポップは、三賢者ポップ（仮）としてレオナ姫の元、ある時はモンスターに襲われる村を救い、ある時は交通網が破壊された村をルーラで巡り、避難物資の配送から村人の手当を、またある時はレオナ姫を連れ国々を巡るボディーガード兼案内役をこなしていた。

もつとも……レオナ姫の采配で、危険な場所にはマアムと、安全な村の中ならメルルを同行しての仕事となったが。

・・・レオナ姫の機転をきかせた采配である。そこによこしまな心・・・一切ないと願いたい。

「よしっ！今日はここまでっ！」

「ああ、疲れたわい。」

まぞっほを筆頭に新たなる賢者の卵たち。

マトリフ師匠が病に臥せ様子を窺った、ある日。

まぞっほに修行をつけてくれと頼まれたポップ。

「いつか取る弟子へと向けた練習だと思つて代わりに稽古をつけてやってくれ。」と、マトリフ師匠に頼まれては断るわけにはいかず快く引き受けるのだった。

「じゃあ、ポップ君がいなくなつてもいいように、パプニカにいる有望な子達もお願いね。」

と、レオナ姫に言われては

（任せられるようになったら、三賢者（仮）なんて、すぐ辞めてやる！）と、心に固く誓うポップだった。

ちなみにマトリフ師匠に比べれば全然厳しくなかつたりするのは、仕方のない事で



ある。

こんな何気ない日常は、ある一報から始まる事件で終わることになる。  
新たな戦いが始まろうとしている・・・。

## Prologue 2 それぞれの決断

ダイの剣の丘で、みんなが集まった最後の日。レオナはポップに問いかけた。

別にそれはポップだけに聞く言葉ではなかったし、みんなの指針を確認する為の言葉だったのだが。

「ねえポップ君、あなたはこれからどうするつもりなの？」

「そ、それはっ！、そっ……。」

言いかけて言葉を止める、そんな事は決まっているっ！ダイを探す。その言葉を発するのを止め……

バーンとの最終決戦後、ポップは何振り構わず一人でダイを探すつもりだった。

そんな時に思い出すのは、師マトリフの言葉だった。

(そうだ、こんな時こそクールになれ！)

ダイが行けて、俺が行けない場所はねえ！

逆に言うなら、行ける場所にいなかったらどこを探せばいい？

そんな事は決まっている、「わかるはずがない」

これだけ広い世界を探す？

(考える、このちっぽけな脳ミソで考えるんだ)

ダイが行ける場所なら俺は必ずそこへ行ける

だったら、俺はそこをただルーラで巡ればいい。誰にも心配をかけず毎日夜にコツンと。

もつとも、そんな事はマアムもメルルも気づいていたがポップをただ見守るのだった。

ダイがいない世界で、俺が形振り構わずダイを探して助けられる人を見捨てたのをダイが見てたらきつと、あいつは自分の事を考えないで「何をしてるんだよおポップ」と、呆れるだろう。

もし、あいつが俺の知らない場所にいたなら、俺が世界を巡って、あいつがいない分代わりにそこにいる人たちを助けて、その先でただダイらしき人影がいないか聞けばいい。そう、それだけだ。

最終決戦に挑んだみんな、そしてゴメちゃんが叶えてくれた最後の願いで、世界は一つに繋がった。

だったら顔を知らなくても誰かが声を知ってるはずだ。顔を知らなくても勇者ダイ

の声を覚えていてくれる人がいれば、きっと見つかるかもしれない。

レオナ姫ならきつと、王様たちに掛け合つて、ダイの行方を探すお触れを出してくれる。なんなら知っている王様達に頭を自分が下げに行つてもいい。

難しい事じゃない、多少無茶かもしれないけど、これなら無理じゃない。

だから、俺はレオナの姫さんの目を見て・・・

「……俺は残るよ。勿論ダイがいそうだと話を聞いたら、その場所に全力で飛んで本当かどうか確かめるだろうけど、それで助けられる人を見捨てたら俺はきつとダイに怒られる。顔向けできねえ。」

そういつつ自分の頬をかくポップ。

目を大きく開くレオナ。

「意外だわ、あなたなら何も言わずに飛び出すと思つてたのに、当てが外れたわね。」

そう言つて頬を膨らませるレオナ。

「ははっ、それで姫さんが城を飛び出して、俺と一緒にダイを探すのか。俺が好きなのはマアムなんだぜ勘違いさせて、焼きもち焼かれて拳句の果てにはホオをひっぱ叩かれちまうよ。」

ウインクしながらマアムを見るポップ。

まんざらでもなさそうな感じに頬を膨らませて顔を赤くするマーム。

「もう、ポップ……。」

「のろけてるところ悪いが、俺は寄り道してから魔界に戻ろうと思ってる。」

メルルからの、ただならぬ気配も無視し我関せずと会話に割り込むラーハルト。

「「寄り道？」」

はもる声、相変わらずマイペースなのかラーハルトは言葉が続ける。

「そうだ、ヒュンケルお前を連れていきたい場所がある。」

「わかった。だが、その後俺も魔界へ連れていけ。もしダイがこつちにいないなら俺は魔界を探そうと思う。」

「ふん、当然だ。ダイ様を見つけるのは俺の役目だ。だが、その前に使い物にならないお前を、どうにかしようと思っただけだ。」

「そうか。」

ヒュンケルとラーハルト。二人は目を見て真意を語りあう。

そんな少ない言葉でお互いを理解する二人を見て、レオナはポップの耳そばに近づいて小声で話す。

「ねえポップ、あの二人つてもしかしてホ「ちよつとストップ姫さん、それ以上は言っちゃいけねえ。」

さすがのポップもレオナの言葉にタジタジだ。

(せっかくだしエイミにこの事帰ったら早速教えておこうかしら。) グフフフ

そのせいでエイミが不在となり自分が困るのに気づいていないレオナであった。一番の被害者は巻き添えで三賢者(仮)にされてしまうポップだったりする。

話はその後も続き、ポップ、マアム、メルルがレオナのいるパプニカで情報あらば暴れている魔物の討伐や復興の手伝いを。クロコダイン、ヒム、チウはデルムリン島に残ることを決めた。

ヒュンケル、ラーハルトは後々魔界へと向かいダイ搜索を決めた。その後ろにエイミがひっそりと後を追いつながら。

エイミに、こっそりとヒュンケルの現在地と旅立つのを伝えたレオナ。

その翌日エイミの姿が見えずマリリンが部屋で見つけた手紙をレオナへと手渡した。

簡潔に説明すると以下の内容である。

ヒュンケルを追いかけるので三賢者を辞職します。エイミの辞職願いである、

この日パプニカにてレオナの叫び声が響き渡った。

エイミがいなくなった分増えるお仕事。こういう時は使徒同士助け合いよね。と謎

の理論武装で、呼び出したポップに告げた。

「と、言うわけでポップ君、ちゃんとお給料も出すし今日から貴方は三賢者ね。」

ポップの三賢者（仮）就任の決定的瞬間であった。

話は巡る巡る代わり、ヒュンケルとラーハルトの二人＋エイミ。実は尾行に気が付いているのが、寡黙なる二人はスルーしていたのは、ここだけの話である。

「着いたぞ。」

ぶつきらぼうに言い放つラーハルト。

「ここは……。」

「アルゴ岬にある奇跡の泉だ。ここで療養すれば多少はマシになるかもしれん。」

そこは竜の騎士の聖域の一つ。ベンガーナ南端の岬。代々竜の騎士が体力の回復を行う場所である。

「そうか、竜の騎士ではないが奇跡の泉、その名前に期待しよう。」

「聞けヒュンケル、魔界へと至れる場所は、この世界にいくつかある。魔界へと向かうには魔族の秘術……そして、それを行使する魔力が必要だ。故に後ろにいる女を説得するんだな。」

この後のやり取りは想像にお任せする。だってエイミさんチョロインだもの。イケメンは爆ぜていいと思います。

現在、カール国王アバンとなったアバンから緊急の報せがテラン国王フォルケンへと届けられた。

「カール王国にいた魔物が急遽東進を開始、近日テラン領内へと侵入すると予想される。」と。

フォルケンは病床の中、兵士たちへ指示を送り速やかに国民の避難が行われた。この際アバンからレオナへと応援要請も並行して行われ（当然フォルケンにも伝えられている）、回復魔法とルーラが使えるようになった三賢者候補達により避難は速やかに行われた。

この時、カールとテラン国境付近を偵察した兵士がもたらした報告がフォルケンからレオナへと伝えられた。

「カールより流れた魔物とテランにいたと思われる魔物が交戦を開始。少年と思わしき人影あり。」



これを受け、レオナは即座にポップ、マアム、メルルを召集。

「大変なことになったわ。まぞつほさんがルーラでテランから戻ってきたの。フォルケン王からのメッセージを託されてね。カールより流れた魔物とテランにいたと思われる魔物が交戦を開始。少年と思わしき人影ありと」

息を？む。魔物の中にいる。ダイぐらいの大きさの人間って言ったらダイかもしれない。多分、そう考えたのは俺だけじゃなく姫さんもテランの王様だって、そう考えちゃうだろう。

進む話の中、辛うじて頭に入ったのは

「悪しき魔物なら討伐を、ついでに人影の正体を突き止めるのよ、ポップ君!!これはダイ君の搜索じゃなく、民の為なんだからね。」

そう言いながらウインクした姫さん姿のだった。

俺はすぐさまマアムとメルルの肩に手を置き、テランへと向かった。

「ルーラ!!!」

話の内容と、詳しい位置をメルルに確認を取ってマアムを連れてトベルーラで国境付近へと向かった。そこで聞いていた話と違う状況について俺はマアムに声をかけた。

「あれ？魔物同士が争っていたんじゃないのか？」

「・・・、はずよね。あれってホイミスライムよね？。回復魔法を他の魔物にかけているみたいよ。」

「と、取り敢えず近づいて見るか・・・？悪しき魔物って感じはなさそう・・・だよな。」

「ええ、私もそう思う。ポップ近くまで行ってみましょう。」

「あ、ああ。」

魔物同士が争っていたのだろうか、確かにケガをした魔物は多くいるが死んでいる魔物の姿はなく・・・。

「って、あれ？あれは、バーンとの戦いの時にいた人型の魔物だよな。」

「ねえ、もしかして少年ぐらいの人影って・・・。」

そこに混じっていたのは人型の魔物。バーンとの最終決戦の時に現れた魔界の魔物バアラック。

ポップとマームはその魔物の正確な名前は知らないが、どうやらそれが少年らしき人影の正体だったらしい。

「こんな、落ちかよ。」

たははと笑いながら、肩を落とすポップ。

「ちよつと待ってポップ、人影の正体は分かっただけけれど、なんで争いが終わっているのかしら。」

首をかしげるマーム。マームはふと振り返ると、ポップの後ろに見慣れた姿が見えた。

「久しぶりだね、ポップ。」

久しぶりに聞いた声。ポップが振り返るとそこには……

チウの姿があつた。